

## 『紅樓夢』日訳本における詩歌の翻訳について\*

(伊藤漱平氏『好了歌』の訳を例に)

趙 秀娟\*

About the Poetry Translation in the Japanese version of "Koromu"  
(for Example of the Translation to Koryoka by Sohe ITO)  
Shuken TYO\*

The Japanese redologist Sohe Ito made great achievements in Japanese redological studies. Being well aware of the subjectivity of literature translation, he aimed to show the Chinese classic masterpiece in domestication translation in his full-text translation to Kouroumu. This kind of effort is expressed typically in the translation to the oral poem of Koryoka, which reveals the difficulties in poem translation. In his Japanese translation of Kouroumu, Sohe Ito made every effort to decrease the language barrier that may be caused by the cultural difference by using language in Japanese own style, but it also leads to the loss of profound language information and cultural connotations from the original text.

**Key Words:** Sohe ITO, Kouroumu, Japanese Translation, Koryoka

### 1. 緒 言

中国古典名著「紅樓夢」は十八世紀末に日本に伝わった後、当時の漢学者や文学者たちにより抄訳、改訳を重ね、しだいに広く知られるようになり、上世紀の半ばごろには全訳本も出現した。この中国伝統文化の集大成作を翻訳するとき、如何に言葉の壁を乗り越え、原文に含まれるさまざまな文化的要素を的確に訳すかは非常に難しいことである。その点は詩歌の翻訳において一番著しく現れている。原作者と訳者はもとより、役者たちもそれぞれの翻訳目標の相異により、言葉の訳出方法も訳文の組立ても異なり、全体的なスタイルも異なった様相を示す訳文を読者に見せてくれる。それは訳者が原詩の言葉、且つそれに含まれる文化的な要素を訳すときに、異国文化と本国文化をどちらに原点に置くかという処理し方に深くかかわっていると考えられる。

『紅樓夢』における詩曲賦類の作品は物語り全体の構造、作者のアイディアおよび筋展開、人物運命の隠喩の面で極めて重要な役割を果たす。特に、『好了歌』は世の中の俗物たちが物欲を捨て難い現実と人生の無常を皮肉な口調で詠い、超然とした人生態度を表した。日本の現代中国文学研究者伊藤漱平氏は五十年余にわたり、『紅樓夢』についての研究、翻訳する仕事に携わり、優れた実績をあげると同時に、『紅樓夢』が日本での広がり大きな貢献をした。本論文では伊藤氏の『紅樓夢』全訳本（1957-1960年、平凡社）における『好了歌』の訳文を対象に分析し、詩歌翻訳における策略を研究したい。

### 2. 伊藤訳本における『好了歌』の訳文

『好了歌』は『紅樓夢』の第一回“甄士隱 夢路に奇しき玉を見知ること 賈雨村 浮世に妙なる女を恋うること”（原文：甄士隱夢幻識通靈 賈雨村風塵懷閨秀）にある詩歌で、全詩は以下のとおりである<sup>(1)</sup>。

世人都曉神仙好，唯有功名忘不了。  
古今將相在何方，荒塚一堆草沒了。

\* 原稿受付 2015年2月25日

\* 北京理工大学外国語学院日本語学部（〒100081 中国北京市海淀区中関村大街5号）  
E-mail:xiujuan@126.com

世人都晓神仙好，只有金银忘不了。  
终身只恨聚无多，及到多时眼闭了。

世人都晓神仙好，只有娇妻忘不了。  
君生日日说恩情，君死又随人去了。

世人都晓神仙好，只有儿孙忘不了。  
痴心父母古来多，孝顺儿孙谁见了。

（現代語訳文：世人みな神仙が好いと知るが、ただ功名は忘れられない。古今の将相今どこにあるか。荒塚一堆，草に没しただけ。世人みな神仙が好いと知るが、ただ金銀は忘れられない。終朝ただ聚めて足りないことを恨むが、多くなったときには眼閉じてしまう。世人みな神仙が好いと知るが、ただ嬌妻は忘れられない。君が生きたときは日々恩情をいうが、君死んだら又人に随いて去る。世人みな神仙が好いと知るが、ただ児孫は忘れられない。痴心の父母は古来多いが、孝顺の児孫は誰か見たの。）

伊藤漱平氏の訳文は下のおりである<sup>(2)</sup>。

たれも成りたや 仙人さまには  
さりとして出世も捨てきれぬとは  
大臣に大将 いずこへ失せたか  
草ぼうぼうの 塚荒れほうだい

たれも成りたや 仙人さまには  
さりとして金銀も捨てきれぬとは  
朝から晩まで たりぬたりぬで  
たりた頃には その眼が閉じる

たれも成りたや 仙人さまには  
さりとして女房も捨てきれぬとは  
生あるうちこそ 情の見せ場よ  
死んだが切れ目 尻をば見せる

たれも成りたや 仙人さまには  
さりとして孫子も捨てきれぬとは  
親馬鹿殿なら 掃くほどあれど  
孝行息子の やれ顔見たきもの

原文と訳文を比較して分かるように、『好了歌』の形式は整然としているにもかかわらず、正統定型詩とは又異なっている。語彙の面から見れば、『好了歌』の行間、機知に富んだ慣用語など口語にしかない言い方があふれている。伊藤氏がそれに対応する日本語の口語と俗語に翻訳するように苦心した。たとえば、「君死又随人去了」（又人に随いて去る）は“尻をば見せる”に、「痴心父母」（痴心の父母）を「親馬鹿殿」に訳した。このように、詩歌の随所にある機知に富んだ慣用語を生き生きとユーモアに満ちた口調で表現し、なかなかの秀訳と言えよう。

### 3. 韻脚「好」と「了」の翻訳

詩歌の形式からいえば、『好了歌』は「樂府歌行」体に類似し、内容も歌謡に近い。その言葉が非常に自然で、なめらかで、リズム感に富む。全編は排比で繰り返して歌い、その内容は四段にわけ、段毎に四句、句毎に七字という規則正しい構造をとっている。四つの段はみな「世人都曉神仙好」（世人みな神仙が好いと知るが）という言葉からはじめ、前の二句の語尾にはそれぞれ「好」（「よい」）、「了」（「完了した」）を韻脚に、第四句の終わりは「た」字を持って詩を結ぶ。この詩歌は明らかに口語色を帯びているにもかかわらず、全体の構造が簡潔明確で、リズム感が強い。それに、語尾も韻を踏んでいて、文字簡明のわりには意味が非常に奥深い。

また、『好了歌』における「好」と「了」は韻脚のほかに、また詩歌主旨の暗示と隠喩というキーワードの役割をも果している。『好了歌』を翻訳するとき、いかにこの「好」と「了」を訳すかは翻訳の至難点である。伊藤氏の訳文においては、『好了歌』の発句「世人都曉神仙好、唯有〇〇忘不了」（世人みな神仙が好いと知るが、ただ功名は忘れられない）を「たれも成りたや 仙人さまには、さりとて〇〇も捨てきれぬとは」に訳した。ここで、原文の「好」の代わりに、「には」と「とは」をもって韻をつけ、リズム感を強めようとする。

「了」という字は原詩の中で、段落ごとに二回現れ、その意味は異なっている。第二句「唯有〇〇忘不了」においては、前の動詞「忘」と否定助動詞「不」とともに「することができない」、「〇〇られない」という意味になる。伊藤氏の訳文には、「忘れられない」を「捨てきれぬ」に訳し、接尾語「きれる」で意味を強める。しかし、『好了歌』原文には、毎段落最後の「了」は前の「了」と違って、「完了」、「てしまう」という完成状態を表す助動詞で、その前の動詞と一緒に動作の完了を強調する。それに対して、伊藤氏の訳文には、特別な処理をしてない。

原書『紅樓夢』には、『好了歌』のすぐ下に「好」と「了」の意味と相互関係について説明部分がある。甄士隱とびっこ道士の会話である<sup>(1)</sup>。

士隱听了，便迎上来道：“你满口说些什么？只听见些‘好’‘了’‘好’‘了’。”那道人笑道：“你若果听见‘好’‘了’二字，还算你明白。可知世上万般，好便是了，了便是好。若不了，便不好，若要好，须是了。我这歌儿，便名《好了歌》。”

(士隱がこれ聞いて、言った。「何をでたらめに言っている？『好』と『了』だけ聞き取れた。」その道士は笑って、「『好』と『了』を聞き取れたとすれば、なかなか賢明な方じゃ。世の中のことは、よいことは終わったこと、終わったことはよいことだ。終わってないことは好いことではないし、好いことは終わったことでなければならぬ。この歌は『好了歌』と言うから。）」

伊藤氏の訳文は下のとおりである<sup>(2)</sup>。

これを聞いた士隱、急ぎ道士のそばへ寄ってきて、「いったい何をさいぜんから唱えておいでですか？『には』だの『とは』だのばかり仰せのようですが……」とたずねました。道士は笑って、「ほほう、『には』と『とは』のふたことが聞きとれなさったとすれば、なかなかあなたもわかったおかたじゃ。この世のことは万事が、『には』は『とは』だ、『には』は『とは』だ。『とは』でなければ『には』ではない、『には』でありたければ『とは』でなけりゃならん。それゆえ拙道のこの歌は『にはとはづくし』と申しますがな。」

ごらんのように、原文のなかで、「好」と「了」は両方とも実際的な想定意味と豊かな隠喩指向を持っている言い方で、それによって暗示する意味もお互いに密接に関連していて、作者の独創的な構想と全書の趣旨が巧妙に現れる。訳文においては、「好」と「了」を実際の意味指向を持っていない複合助詞「には」と「とは」に訳した。その結果として、「好」と「了」の豊かな意味と原詩の隠喩的な内容は十分に表現していなく、『好了歌』が全書において全体的要綱としての役割もなくなってしまふ。

#### 4. 異言語環境における詩歌翻訳

日本語と中国語はそれぞれ所属する言語システムが異なっている。日本語は膠着語で、表音の仮名と表意の漢字から構成されている。それに、日本語の漢字は読み方が音か訓かによって、文の長さや音節数も違う。伝統詩歌の作者は同義語や付着語を選択してリズムを調整し、詩のリズム感は主に五または七の音節数によって表現される。しかも、日本語は文は漢字と助詞から構成するので、語尾の韻を踏む文字は常に虚詞にあたる。それゆえに、伝統的な日本詩はそんなに韻脚を重視しない。

それに対して、中国語は孤立語で、表意文字の漢字だけで文を構成するので、同じ長さの文字にしては情報量がもっと大きい。中国語の伝統詩は言葉の平仄や語尾の韻字によってリズム感を強調する。特に、その韻脚は言葉の意味から見ても審美の角度から考察しても無視できない要素である。中国語の伝統詩歌を日本語に翻訳する場合には、いかに整然とした原作における韻字を形式保持と共に流暢で、達意の日本詩に訳すかは非常に難しいことである。『紅樓夢』『好了歌』の翻訳はまさにその例で、詩歌翻訳における難点を明らかにした。即ち、韻脚について、特に暗示意味を持っている韻脚についての翻訳である。

『好了歌』は字面から見れば、簡単そうに見えるが、全体的な考えれば『紅樓夢』においては特別な地位を占めている。それは作者の創作思想の直接的な現れで、その内容に含まれている深い哲理はテキストの意味そのものを超えている。ですから、『好了歌』の名を『にはとはづくし』に訳すように、虚詞を韻脚にし、表音の仮名を韻脚にする訳出方法は元言葉環境での特定の意義を実現しかねることになり、原文に潜む人生哲学も十分に現れていない。伊藤漱平氏は中国語の専門家で、長年にわたり『紅樓夢』の翻訳に力を捧げて、その訳文はなかなかの佳訳は否認できない。伊藤氏は『紅樓夢』における詩歌を翻訳するときに、中国の古典と日本読者の審美距離を短縮させようと、訳者としてのアイデンティティに取り組んで、ほとんど意識の策略で日本の読者に親しみやすい風に翻訳した。しかし、『好了歌』の『紅樓夢』に占める特別な地位から考えれば、直訳する上に注釈をつけた訳出方法が読者に原文の趣旨がもっと理解されるだろう。

#### 5. 結 言

詩歌はもともと作者が言葉という符号を調整して文学的イメージを営造し、推敲を重ねることによって作ったものなので、形式より言外の深意がもっと大切である。詩歌を翻訳する場合には、文化の相異から言葉転換の不当と誤解が起こるのも可能である。異文化伝達する場合、語彙の転換はまったく同じ言葉を考えるより、ベストの対応を求めるのがもっと合理的といえよう。異文化コミュニケーションにおいて言語、文化間の差異をつなぐためには、文化思惟の違いを考えて、自国文化に適する言葉を選択する上に、全体的に統合する翻訳方法が適切である。

本稿では、『好了歌』に焦点をしばったが、今後は原文に対して複数訳者による詩歌訳文の比較や、翻訳目的による策略の相異も考慮して取り組みたい。さらに、翻訳のみに捕らわれず、日本と中国語圏間の異文化伝達の要素が含まれる他の情報にも目を向け、日本と中国語圏間の異文化コミュニケーションについての考察を深めていきたい。

#### 文 献

- (1) 曹雪芹著、俞平伯校訂《紅樓夢八十回校本》、人民文学出版社(1958)、p12.
- (2) 伊藤漱平訳、中国古典大系 45 紅樓夢』(上) 第一回 “甄士隱 夢路に奇しき玉を見知ること 賈雨村 浮世に妙なる女を恋うること”、平凡社、初版(1969)、pp.15-16.

(平成 27 年 3 月 31 日受理)